

特116

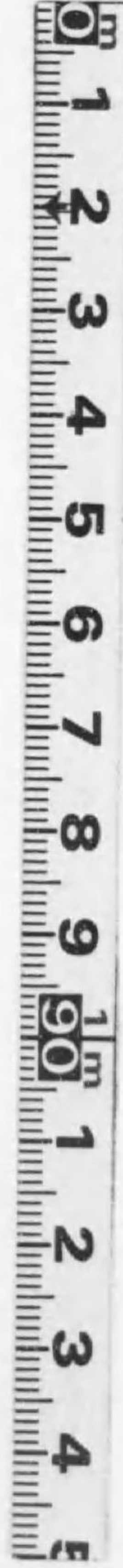
404

日蓮聖人御書集

第二輯



東京 春誠社出版部



始



# 御書普及版第二輯目次

一、主師親御書	三
一、守護國家論	完
大文第一	四〇
大文第二	五一
大文第三	五六
大文第四	六六
大文第五	七三
大文第六	八〇

(未完)

持 116  
404

## 主師親御書

録外一三ノ三〇

建長七年 三十四歲

釋迦佛は我等が爲には主也師也親也。一人してすくひ護ると説き給へり。阿彌陀佛は我等が爲には主ならず親ならず師ならず。然れば天台大師是を釋して曰、西方は佛別にして緣異なり、佛別なるが故に隱顯の義成せず緣異なるが故に子父の義成せず、又此經の首末に全く此旨無し眼を閉て穿鑿せよと、實なるかな。釋迦佛は中天竺の淨飯大王の太子として十九の御年家を出給ひて檀特山と申す山に籠らせ給ひ、高峯に登りては妻木をとり深谷に下りては水結び難行苦行して、御年三十と申せしに佛にならせ給ひて一代聖教を説き給ひしに、上には華嚴阿含方等般若等の種種の經經を説かせ給へども、内心には法華經を説ばやおぼしめされしかども、衆生の機根まちまちにして一種ならざる間佛の御心をば説き給はで人の心に隨ひ萬の經を説き給へり。此の如く四十二年が程は心苦しく思食しかども、今法華經に至て我願既に満足しぬ、我が如くに衆生を佛になさんと説き給へり。久遠より已來或は鹿となり、或は熊となり、或時は鬼神の爲に食れ給へり。此如き功德をば法華經を信じたらん衆生は是真佛子とて是れ實の我子なり。此功德を此人に與へんと説き給へり。是程に思食たる親の釋迦佛をばないがしろに思ひなして唯以一大事と説給へる法華經を信せざらん人は争か佛になるべきや能能心を留て案ずべし。二の卷に云く、若人不信毀謗此經則斷一切世間佛種、乃至不受餘經一偈と。文の心

は、佛にならん爲には唯法華經を受持せん事を願て餘經の一偈一句をも受ざれと。三の卷に云く、如從飢國來忽遇大王膳と。文の心は飢たる國より來て忽に大王の膳にあへり。心は、犬野干の心を致すとも迦葉目連等の小乗の心をば起さざれ、破たる石は合とも、枯木に花はさくとも、二乗は佛になるべからずと仰せられしかば、須菩提は茫然として手の一鉢をなげ、迦葉は涕泣の聲大千界を響すと申て歎き悲みしが、今法華經に至て迦葉尊者は光明如來の記別を授りしかば、目連、須菩提、摩訶迦葉等は是を見て我等も定て佛になるべし。飢たる國より來て忽に大王の膳にあへるが如しと喜びし文也。我等衆生無始曠劫より已來、妙法蓮華經の如意寶珠を片時も相離れざれども、無明の酒にたばらかされて衣の裏にかけたりと知らずして少きを得て足ぬと思ひぬ。南無妙法蓮華經とだに唱奉りたらましかば速に佛に成べかりし衆生どもの、五戒十善等のわずかなる戒を以て或は天に生れて大梵天帝釋の身と成ていみじき事と思ひ、或時は人に生れて諸の國王大臣公卿殿上人等の身と成て是程のたのしみなしと思ひ、少きを得て足ぬと思ひ悦びあへり。是を佛は夢の中のさかへまぼろしのたのしみ也、唯法華經を持奉り速に佛になるべしと説給へり。又四の卷に云く、而も此經は如來の現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや云云。釋迦佛は師子頰王の孫、淨飯王には嫡子也。十善の位をすて、五天竺第一なりし美女耶輸多羅女をふりすて、十九の御年出家して勤行ひ給しかば、三十の御年成道し御坐て三十二相八十種好の御形にて、御幸なる時は大梵天王帝釋左右に立、多聞持國等の四天王先後圍繞

せり、法を説給ふ御時は四辯八音の説法は祇園精舎に滿、三智五眼の徳は四海にしけり。然れば何れの人か佛を惡むべきなれども、尙怨嫉するもの多し。まして滅度の後一毫の煩惱をも斷せず少しの罪をも辨へざらん法華經の行者を惡み嫉む者多からん事は雲霞の如くならんと思えたり。然則末代惡世に此經を有のまゝに説人には敵多からんと説れて候に、世間の人人我も持たり我も讀み奉り行じ候に敵なきは虚言歟、法華經の實ならざる歟、又實の御經ならば、當世の人人經をよみまいらせ候は虚よみか、實の行者にてはなきか如何。能能心得べき事也、明むべき物也。四の卷に多寶如來は、釋迦牟尼佛御年三十にして佛に成給ふに、初には華嚴經と申す經を十方華王のみぎりにして別圓頓大の法輪、法慧功德林金剛幢金剛藏等の四菩薩に對して三七日の間説給しにも來り給はず。其二乗の機根協はざりしかば瓔珞細軟の衣をぬぎすて麤弊垢膩の衣を著、波羅奈國鹿野苑に趣て十二年の間生滅四諦の法門を説給ひしに、阿若俱鄰等の五人證果し、八萬の諸天は無生忍を得たり。次に欲色二界の中間、大寶坊の儀式、淨名の御室には三萬二千の牀を立、般若白鷺池の邊、十六會の儀式、染淨虛融の旨をのべ給しにも來給はず。法華經にも一の卷乃至四の卷人記品までも來給はず。寶塔品に至て初て來給へり。釋迦佛先四十餘年の經を我と虚事と仰せられしかば人用る事なく。法華經を眞實也と説せ給へども、佛と云は無虚妄の人とて永く虚言し給はずと聞しに、一日ならず二日ならず一月ならず二月ならず一年二年ならず四十餘年の程まで虚言したりと仰られしかば、又此經を實と説給も虚言にやあらんすら

んと不審なししかば、此不審釋迦佛一人しては舍利佛を始め事はれがたかりしに、此多寶佛實淨世界よりはるばると來らせ給て法華經は皆是眞實なりと證明し給しに、先の四十餘年の經を虛言と仰せらるゝ事、實の虛言に定るなり。又法華經より外の一切經を空に浮べて、文文句句阿難尊者の如く覺り富樓那の辯舌の如くに説とも其を難事とせず。又須彌山と申す山は十六萬八千由旬の金山にて候を佗方世界へつぶてになぐる者ありとも難事には候はじ。佛の滅度の後當世末代惡世に法華經を有のままに能説ん、是を難しとすと説せ給へり。五天竺第一の大力なりし提婆達多も長三丈五尺廣一丈二尺の石をこそ佛になげかけて候しが。又漢土第一の大力楚の項羽と申せし人も九石入の釜に水滿候しをこそひさげ候しが。其に是は須彌山をばなぐる者は有とも、此經を説の如く讀奉らん人は有がたしと説て候に、人ごと此經をよみ書き説き候。經文を虛言に成て當世の人人を皆法華經の行者と思ふべきか。能御心得有べき事也。五の卷提婆品に云、若し善男子善女人有て妙法華經の提婆達多品を聞いて、淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は地獄餓鬼畜生に墮ちずして十方の佛前に生せん。此品には二の大事あり。一には提婆達多と申は阿難尊者には兄、解飯王には嫡子、師子頰王には孫、佛にはいとこにて有しが、佛は一閻浮提第一の道心者にてましまししに怨をなして、我は又閻浮提第一の邪見放逸の者とならんと誓て、萬の惡人を語て佛に怨をなして三逆罪を作て、現身に大地破て無間大城に墮て候しを天王如來と申す記別を授らるる品にて候、然れば善男子と申は男、此經を信じまひら

せて聽聞するならば、提婆達多程の惡人だにも佛になる。まして末代の人たはたとひ重罪なりとも多分は十惡をすぎず、まして深く持奉る人佛にならざるべきや。二には婆娑羅龍王のむすめ龍女と申は八歳のくちなは佛に成たる品にて候。此事めづらしく貴き事にて候。其故は、華嚴經には女人地獄使能斷佛種子、外面似菩薩内心如夜叉と。女の心は、女人は地獄の使よく佛の種をたつ、外面は菩薩に似たれども内心は夜叉の如しと云へり。又云、一度女人を見る者はよく眼の功德を失ふ、設ひ大蛇をば見るとも女人を見るべからずと云、又有る經には所有三千界男子諸煩惱合集爲一人女人之業障、三千大千世界にあらゆる男子の諸の煩惱を取集て女人一人の罪とすと云へり。或經には三世の諸佛の眼は脱て大地に墮るとも女人は佛に成べからずと説給へり。此品の意は、人畜をいはば畜生たる龍女だにも佛に成れり。まして我等は形のごとく人間の果報也。彼が果報にはまされり争か佛にならざるべきやと思食すべきなり。中にも三惡道におちずと説て候。其地獄と申は八寒、八熱、乃至八大地獄の中に初め淺き等活地獄を尋れば、此一閻浮提の下一千由旬也。其中の罪人は互に常に害心をいだけり。もしたまたま相見れば獵師が鹿にあへるが如し。各各鐵の爪を以て互につかみさく血肉皆盡て唯殘て骨のみあり。或は獄卒棒を以て頭よりあなうらに至るまで皆打くだく、身も破れくだけて猶沙の如し焦熱なんど申は譬んかたなき苦也。鐵城四方に回て門を閉たれば力士も開きがたく、猛火高くのぼつて金色のつばさもかけるべからず。餓鬼道と申は、其住處に二あり。一には地の下五百由旬の閻魔王

宮にあり。二には人天の中にもまじはれり。其相種種也。或は腹は大海の如く、のんどは鏡の如くなれば、明ても暮ても食すともあくべからず。まして五百生七生なんど飲食の名をだにもきかず。或は己れが頭をくだきて腦を食するもあり。或は一夜に五人の子を生て夜の内に食するもあり。萬果林に結び。取んとすれば悉く劍林となり。萬水大海に流れぬ、飲んとすれば猛火となる。如何にしてか此苦をまぬがるべき。次に畜生道と申は、其住所に二あり。根本は大海に住す、枝末は人天に難れり短き物は長き物にのまれ、小き物は大きなる物に食はれ互に相食てしばらくもやすむ事なし。或は鳥獸と生れ、或は牛馬と成ても重き物をおほせられ、西へ行んと思へば東へやられ、東へ行んとすれば西へやらる、山野に多くある水と草をのみ思て餘は知るところなし。然るに善男子善女人此法華經を持ち南無妙法蓮華經と唱へ奉らば此三罪を脱るべしと説給へり。何事か是にしかん、たのもしきかな、たのもしきかな。又五の卷に云、我聞大乘教度脫苦衆生と。心は、われ大乘の教をひらいてと申は法華經を申す。苦の衆生とは何ぞや、地獄の衆生にもあらず、餓鬼道の衆生にもあらず、女人を指て苦の衆生と名たり。五障三従と申て三したがふ事有て五の障りあり。龍女我れ女人をつみしれり然ば餘をば知べからず女人を導かんと誓へり。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

日

蓮花押

# 守護國家論

錄内一〇ノ一

正元元年

三十八歲

夫 偶 偶 まの十方微塵三惡の身を脱れて希に閻浮日本爪上の生を受け、亦た閻浮日域爪上の生捨て十方微塵三惡の身を受けんこと疑無き者也。然るに生を捨て惡趣に墮する緣一に非ず。或は妻子眷屬の哀憐に依り、或は殺生惡逆の重業に依り、或は國主と成りて民衆の歎きを知らざるに依り、或は法の邪正を知らざるに依り、或は惡師を信するに依る。此の中に於ても世間の善惡は眼前に在り愚人も之を辨ふ可し。佛法の邪正師の善惡に於ては證果の聖人尙ほ之を知らず況や末代の凡夫に於てをや。加之佛日西山に隠れ餘光東域を照してより已來、四依の慧燈は日に滅じ三藏の法流は月に濁る、實經に迷へる論師は眞理の月に雲を副へ、權經に執する譯者は實經の珠を碎きて權經の石を成す、如何に況や震旦の人師の宗義其の誤り無んや。如何に況や日本邊土の末學誤りは多く實は少き者歟。

隨て其の教を學する人數は龍鱗よりも多けれ共得道の者は驕角よりも希れなり。或は權教に依るが故に、或は時機不相應の教に依るが故に、或は凡聖の教を辨せざるが故に、或は權實二教を辨せざるが故に、或は權教を實教と謂ふに依るが故に、或は位の高下を知らざるが故なり。凡夫の習ひ佛法に就て生死の業を増すこと其の緣一に非ず。中昔し邪智の上人有りて、末代の愚人の爲に一切の宗義を

破して選擇集一卷を造る、名を鸞緯導の三師に假りて一代を二門に分ち實經を録して權經に入れ、法華眞言の直道を閉ぢて淨土三部の隘路を開く。亦た淨土三部の義にも順ぜずして權實の謗法を成し。かく四聖の種を斷じて阿鼻の底に沈む可ら僻見なり。而るに世人之に順ふ、譬へば大風の小樹の枝を吹くが如く。門弟此の人を重んずること、天衆の帝釋を敬ふに似たり。此の惡義を破らんが爲めに亦た多くの書有り。所謂淨土決義鈔、彈選擇、摧邪輪等也。此の書を造る人皆碩德の名一天に彌ると雖も恐くは未だ選擇集謗法の根源を顯はさず。故に還て惡法の流布を増す。譬へば盛なる早魃の時に小雨を降せば草木彌々枯れ、兵者を打つ刻みに弱兵を先きにすれば強敵ます、力を得るが如し。予此の事を歎く間、一卷の書を造て選擇集謗法の縁起を顯はし、名て守護國家論と號す。願はくは一切の道俗、一時の世事を止めて永却の善苗を植へよ。

今經論を以て邪正を直だす。信謗は佛説に任せ敢て自義を存すること無し。分ちて七門となす。一には如來の經教に於て權實二教を定むることを明らかにし。二には正像末の興廢を明らかにし。三には選擇集の謗法の縁起を明らかにし。四には謗法の者を對治すべき證文を出すことを明らかにし。五には善知識並に眞實の法には値ひ難きことを明らかにし。六には法華涅槃に依りて行者の用心を明らかにし。七には問に隨て答を明らかにす。

大文の第一 如來の經教に於て權實二教を定むる事を明らかにす。

此に於て四有り。一には大部の經の次第を出して流類を攝する事を明にし。二には諸教の淺深を明かにし。三には大小乘を定むることを明かにし。四には且らく權を捨て實に就く可きを明かにす。

第一に大部の經の次第を出して流類を攝することを明かさば。問云、佛最初に如何なる經を説き給ふ乎。答云、華嚴經也。問云、其の證如何。答云、六十華嚴經の離世間淨眼品に云、是の如く我佛聞く、一時佛まかだ國寂滅道場に在りて始めて正覺を成す。法華經の序品に、放光瑞の時、彌勒菩薩十方世界の諸佛の五時の次第を見る時、文殊師利菩薩に問て云く、又諸佛聖主師子の經典の淨妙第一なるを演説し給ふに其の御聲清淨に柔輓の御音を出して諸々の菩薩を教へ給ふこと無數億萬なるを觀る。亦た方便品に佛自ら初成道の時を説きて云く、我れ始め道場に坐し樹を觀じて亦經行しき。乃至、爾の時に諸の梵王及び諸の天帝釋護世の四天王、及び大自在天、並に餘の諸の天衆眷屬百千萬なる、恭敬合掌し禮して、我れに轉法輪を謂す。此等の説は法華經に華嚴經の時を指す文也。故に。華嚴經の第一に云ふ。毗沙門天王、月天子、日天子、釋提桓因、大梵、摩醯首羅等已上。涅槃經に華嚴經の時を説いて云く、既に成道し已て梵天勸請すらく、唯願はくは如來當に衆生の爲めに廣く甘露の門を開き給ふべし。乃至、梵王復た言く、世尊、一切衆生に凡そ三種あり。所謂利根中根鈍根なり、利根は能く受く、唯願はくは爲に説き給へ。佛の言はく、梵王諦かに聽け。諦かに聽け。我れ今當に一切衆生の爲めに甘露の門を開くべし。亦た三十三に華嚴經の時を説て云く、十二部

經修多羅の中の微細の義を我れ先きに已に諸の菩薩の爲に説くが如し。此の如き等の文は、皆諸佛世に出で給ひて一切經の初には必ず華嚴經を説き給ひし證文也。問云、無量義經に云く、初に四諦を説き、乃至、次に方等十二部經摩訶般若華嚴海空を説く、此の文の如きは、般若經の後に華嚴經を説けり、相違如何。答云、淺深の次第なるか、或は後分の華嚴經なるか、法華經の方便品に一代の次第淺深を列ねて云く、無有餘乘（華嚴經也）若二（般若經也）若三（方等經也）此の意也。問云、華嚴經の次に何れの經を説き給ふ乎。答云、阿含經を説き給ふ也。問云、何を以て之れを知るや。答云、法華經の序品に華嚴經の次の經を説いて云く、若し人苦に遭ふて老病死を厭ふには爲めに涅槃を説く。方便品に云く、即ち波羅奈に趣き、乃至、五比丘の爲めに説く。涅槃經に華嚴經の次の經を定て云く、即ち波羅奈國に於て正法輪を轉じて中道を宣説す。此等の經文は華嚴經より後、阿含經を説く也。問云、阿含經の後に何れの經を説き給ふ乎。答云、方等經也。問云、何を以て之れを知るや。答云、無量義經に云く、初め四諦を説き、乃至、次に方等十二部經を説く。涅槃經に云く修多羅より方等を出す。問云、方等とは天竺の語此には大乘と云ふなり。華嚴般若法華涅槃等皆大乘方等也。何ぞ獨り方等に限りて方等の名を立つる乎。答云、實には華嚴般若法華等皆方等也。然りと雖も今方等に於て別して方等の名を立ることは私の義に非ず。無量義經涅槃經の文顯然也。阿含の證果は一向小乘。次に大乘を説く。方等より已後皆大乘と云ふと雖も、大乘の始なるが故に初に從つて方等と云ふ也。例

せば十八界の十半は色なりと雖、初に從つて色境の名を立つるが如し。問云、方等部の諸經の後に何れの經を説き給ふ乎。答云、般若經也。問云、何を以て之れを知るや。答云、涅槃經に曰く、方等より般若を出す。問云、般若經の後に何れの經を説き給ふ乎。答云、無量義經也。問云、何を以て之れを知るや。答云、仁王經に曰く、二十九年中と、無量義經に曰く、四十餘年と。問云、無量義經には般若經の後に華嚴經を列らね、涅槃經には般若經の後に涅槃經を列らね、今の所立の次第は般若の後に無量義經を列ぬ。相違如何。答云、涅槃經の第十四の文を見るに、涅槃經已前の諸經を列ねて涅槃經に對して勝劣を論じ而して法華經を擧げず、第九の卷に於て法華經は涅槃經より已前なりと之を定め給ふ。法華經の序品を見るに、無量義經は法華經の序分也。無量義經には般若の次に華嚴經を列ぬれ共、華嚴經を初時に遺くれば般若經の後は無量義經也。問云、無量義經の後に何れの經を説き給ふ乎。答云、法華經を説き給ふ也。問云、何を以て之れを知るや。答云、法華經の序品に曰く、諸の菩薩の爲めに大乘經の無量義教菩薩法佛所護念と名くるを説き給ふ。佛此の經を説き已つて結跏趺坐し無量義處三昧に入ると。問云、法華經の後に何れの經を説き給ふ乎。答云、普賢經を説き給ふ也。問云、何を以て之れを知るや。答云、普賢經に曰く、卻て後、三月に我れ當に般涅槃すべし。乃至、如來昔し耆闍崛山及び餘の住處に於て、已に廣く一實の道を分別し、今も此の處に於てす。問云、普賢經の後に何れの經を説き給ふ乎。答云、涅槃經を説き給ふ也。問云、何を以て之れを知る

や。答云、普賢經に云く、卻て後三月、我れ當に般涅槃すべし。涅槃經の三十に云く、如來何か故ぞ二月に涅槃し給ふや。亦た、如來は初生出家成道、轉妙法輪皆八日を以てす、何ぞ佛の涅槃のみ獨十五日なるやと云ふ。大部の經大概是の如し。此れより已外の諸大乘經は、次第不定也。或は阿含經より已後に華嚴經を説き、法華經より已後に方等般若を説く、皆義類を以て之を收めて一處に置く可し。

第二に諸經の淺深を明かにすとは、無量義經に云、初め四諦を説き阿含、次に方等十二部經、摩訶般若、華嚴海空を説き、菩薩の歷劫修行を宣説す。亦云、四十餘年には未だ眞實を顯はさず。又云、無量義經は尊きこと上に過ぎたる無し。此等の文の如んば、四十餘年の諸經は無量義經に劣ること疑ひ無き者也。問云、密嚴經に云、一切の經中に勝れたり。大雲經に云、諸經の轉輪聖王なり。と、金光明經に云、諸經中の王なり。と、此等の文を見るに諸大乘經の常の習ひなり。何ぞ一文のみを瞻て無量義經は四十餘年の諸經に勝ると云ふ乎。答云、教主釋尊若し諸經に於て互に勝劣を説かずんば、大小乗の差別權實の不同有る可からず、若し實に差別無きに互に差別淺深等を説かば、諍論の根源惡業起罪の因縁也。爾前の諸經の第一とは縁に隨て不定也。或は小乗の諸經に對して第一なり。或は報身の壽を説く諸經の第一なり。或は俗語眞諦中諦等を説て第一也。一切の第一に非らず。今の無量義經の如きは、四十餘年の諸經に對して第一也。問云、法華經と無量義經と何れが勝れたる乎。答

云、法華經勝れたり。問云、何を以て之れを知るや。答云、無量義經には未だ二乗作佛と久遠實成を明かさず。故に法華經に嫌はれて今説の中に入るなり。問云、法華經と涅槃經と何れが勝れたる乎。答云、法華經勝る也。問云、何を以て之れを知るや。答云、涅槃經に自ら如法華中等と説いて教無所作と云ふ。法華經に當説を指して難信難解と云はざるが故也。問云、涅槃經の文を見るに、涅槃經已前をば皆邪見なりと云ふ。如何。答云、法華經は如來出世の本懷なる故に、今者已満足今正之。其時、然善男子我實成佛已來等と説く。但し諸經の勝劣に於ては、佛自ら我が所説の經典無量千萬億なりと擧了て已説今説當説等と説く時、多寶佛地より涌現して皆是眞實と定め、分身の諸佛は舌相を梵天に付け給ふ。是の如く諸經と法華經との勝劣を定めたりぬ。此の外釋迦如來一佛の所説なれば先後の諸經に對して法華經の勝劣を論す可きに非らず。故に涅槃經に諸經を嫌ふ中に法華經を入れず。法華經は諸經に勝る由之を顯す故也。但し邪見の文に至ては法華經を覺知せざる一類の人、涅槃經を聞きて悟を得る故に、迦葉童子自身並に所引を指して涅槃經より已前を邪見と云ふ也。經の勝劣を論するには非ず。

第三に大小乗を定むることを明かすとは、問云、大小乗の差別如何。答云、常途の説の如きは阿含部の諸經は小乗也。華嚴方等般若法華涅槃等は大乗也。或は六界を明すは小乗にして十界を明すは大乗也。其の外法華經に對して實義を論する時、法華經より外の四十餘年の諸大乘經は皆小乗にして、法



華經は大乗也。問云、諸宗に互て我が所據の經を實大乘と謂ひ、餘宗所據の經を權大乘と云ふこと常の習ひ也。末學に於て是非定め難し。未だ法華經に對して諸大乘經を小乗と稱することを聞知せず。證文如何。答云、宗宗の立義互に是非を論ず。就中末法に於ては世間出世に就て、非を先とし是を後として、自らは非を知らず。愚者の欺く可き所也。但し且らく我等が智を以て四十餘年の現文を見るに此文を破る文無ければ人の是非を信用する可からざる也。其上法華經に對して諸大乘經を小乗と稱することは自答を存す可きに非らず。法華經の方便品に云、佛は自ら大乘に住し給へり。乃至、自ら無上道大乘平等の法を證して、若し小乗を以て化すること乃至一人に於てもせば、我れ則ち慳貪に隋せん。此の事は定めて不可なり。此の文の意は、法華經より外の諸經を皆小乗と説ける也。亦た壽量品に云、小法を樂へる。此等の文は法華經より外の四十餘年の諸經を皆小乗と説ける也。天臺妙樂の釋に於て四十餘年の諸經を小乗なりと釋すとも陀師之を許す可からず。故に但經文を出す也。

第四に且らく權經を關いて實經に就くことを明かすとは、問云、證文如何。答云、十の證文有り。法華經に云、但大乘經典を受持することを樂て、乃至餘經の一偈をも受けざれば一。涅槃經に云、了義經に依て不了義經に依らざれば四十餘年を不是二。法華經に云、此の經は持つこと難し。若し暫くも持つ者は我れ即ち歡喜す。諸佛も亦た然なり。是の如きの人は諸佛の歡め給ふ所なり。是れ即ち勇猛なり。是れ即ち精進也。是れを戒を持ち頭陀を行する者と名づく

末代に於て四十餘年の持戒なく唯。法華經を持つ持戒となす。是三。涅槃經に云、

乘緩の者に於ては乃ち名て緩と爲す。戒緩の者に於ては名て緩と爲さず。菩薩摩訶薩此の大乗に於て心懈慢せずは是を奉戒と名く。正法を護るが爲めに大乘の水を以て而して自ら澡浴す。是の故に菩薩破戒を現すと雖、名て緩と爲さず。是の文法華經の戒を流。是四。法華經に云、妙法華經、乃至、皆是れ眞實なり。此の文意は多寶。法華經の第八普賢菩薩の誓に云、如來の滅後に於て閻浮提の内に廣く流布せしめて斷絶せざらしめん是六。法華經の第七に云、我が滅度の後後の五百歲の中に、閻浮提に於て斷絶せしむること無けん。釋迦如來の。是七。法華經の第四に多寶並に十方の諸佛來集の意趣を説て云、法をして久しく住せしめんが故に此に來至し給へり是八。法華經の第七に法華經を行する者の住處を説て云、如來の滅後に於てまさに一心に受持讀誦解說書寫して説の如く修行すべし。所在の國土に乃至若くは經卷所在の處あらん。若は園の中に於ても、若は林の中に於ても、若は樹の下に於ても、若は僧坊に於ても、若は白衣の舍にても、若は殿堂に在ても、若は山谷曠野にても、是の中に皆塔を起て供養すべし。所以は如何。當に知るべし是の處は即ち是れ道場なり。諸佛此に於てあくのたら三藐三菩提を得。是九。法華經の流通涅槃經の第九に云、我が涅槃の後正法未だ滅せず。餘の八十年に、爾の時に是の經閻浮提に於て當に廣く流布すべし。是の時當に諸の惡比丘有て、是の經を鈔掠し分て多分と作し、能く正法の色香味美を滅すべし。是の諸の惡人復是の如き經典を讀誦すと雖、如來深密の要義を滅餘して。世間の莊嚴文飾無義の語を安置し、前を鈔して後に著け、後を鈔して前に著け、前後を中に著け、中を前

後に著けん。當に知るべし是の如き諸の惡比丘は是れ魔の伴侶なり。乃至、譬へば牧牛女の多く水を乳に加ふるが如し。諸の惡比丘も亦た復た是の如し。雜ふるに世語を以てし、是の經を錯り定め、多くの衆生をして正說正寫正取尊重讚歎供養恭敬することを得しめざらむ。是の惡比丘は利養の爲の故に是の經を廣宣流布すること能はず。分流すべき所少きこと言ふに足らず。彼の牧牛貧窮の女人展轉して乳を賣るに乃至糜と成して乳味無きが如く是の大乗經典大涅槃經も亦復是の如し。展轉薄淡にして氣味有ること無し。氣味無しと雖猶餘經に勝ることは是れ一千倍なること、彼の乳味の諸の苦味に於て千倍勝るゝと爲すが如し。何を以ての故に。是の大乗經典大涅槃經は聲聞經に於て、最もこれ上首たり。是十問云、不了義經を捨て、了義經に就くことは、大圓覺修多羅了義經、大佛頂如來密因修證了義經、是の如き諸の大乗經は皆了義經也。依用と爲す可き乎。答云、了義不了義は所對に隨て不同也。二乘菩薩等の所說の不了義に對すれば、一代の佛說は皆了義也。佛說に就て亦た小乘經は不了義、大乘經は了義也。大乘に就て又四十餘年の諸經は不了義經、法華涅槃大日經等は了義經也。而るに圓覺大佛頂等の諸經は、小乘及び歷劫修行の不了義經に對すれば了義經也。法華經の如き了義には非らざる也。問云、華嚴法相三論等の天臺眞言より以外の諸宗の高祖、各其の經々に依憑して其經々の深義を極めんと欲す。是れ爾る可き乎如何。答云、華嚴宗の如きは、華嚴經に依りて諸經を判じて華嚴經の方便と爲す也。法相宗の如きは、阿含般若等を卑め、華嚴法華涅槃を以て深

密經に同じ同く中道教と立つると雖、亦法華涅槃は一類の一乘を説く故に不了義經なり。深密經には五性各別を存する故に了義經と立つる也。三論宗の如きは、二藏を立て一代を攝し大乘に於て淺深を論ぜず。而も般若經を以て依憑と爲す。此等の諸宗の高祖、多分は四依の菩薩なる歟、定めて所存あらん。是非に及ばず。然りと雖自身の疑を晴さんが爲めに、且く人師の異解を闡いて諸宗依憑の經々を開き見るに。華嚴經の舊譯は五十六、新譯は八十四なり。其の中に法華涅槃の如き一代聖教を集めて方便となす文無し。四乘を説くと雖其中の佛乘に於て十界互具久遠實成を説かず。但し人師に至て五教を立て、先きの四教に諸經を收て華嚴經の方便と爲す。法相宗の如きは、三時教を立るとき法華等を以て深密經に同すと雖、深密經五卷を開き見るに全く法華等を以て中道の内に入れず。三論宗の如きは、二藏を立て時菩薩藏に於て華嚴法華等を收め般若經に同すと雖、新古の般若經を開き見るに全く般若經を以て法華涅槃に同するの文無し。華嚴頓教法華漸教等は、人師の意樂にして佛說に非らざるなり。法華經の如きは、序分の無量義經に隨て四十餘年の年限を擧げ、華嚴方等般若等の大部の諸經の題名を呼んで未顯眞實と定め。正宗法華經に至て一代の勝劣を定むる時、我が所說の經典無量千萬億已說今說當說の金言を吐て、而も其中に於て此法華經最も爲難信難解と説き給ふ時、多寶如來地より湧出して妙法華經皆是れ眞實なりと證誠し。分身の諸佛十方より盡く、一處に集りて舌を梵天に付け給ふ。今此の義を以て余推察を加ふるに、唐土日本に渡れる所の五千七千餘卷の諸經以

外の天竺龍宮四王天過去七佛等の諸經、並に阿難未結集の經、十方世界の塵に同する諸經の勝劣淺深難易掌の中に在り。無量千萬億の中に豈釋迦如來の所説の諸經を漏す可き乎。已説今説當説の年限に入らざる諸經之れ有る可き乎。願くは未代の諸人且らく諸宗の高祖の弱文無義を聞いて、釋迦多寶十方諸佛の強文有義を信すべし。如何に況んや諸宗の末學の偏執を先きと爲し、未代の愚者の人師を本と爲して經論と抛つ者に依憑す可けん哉。故に法華の流通雙林最後の涅槃經に、佛遺言すらく、迦葉童子菩薩言く、法に依て人に依らざれば、義に依て語に依らざれば、智に依て識に依らざれば、了義經に依て不了義經に依らざれば、云々。千世間を見聞するに、自宗の人師を以て三昧發得智慧第一と稱し。無徳凡夫として實經に依て法門を信せしめず。不了義の觀經等を以て時機相應の教と稱し。了義の法華涅槃を聞いて譏りて理深解微の失を付くることは、如來の遺言に背いて依人不依法、依語不依義、依識不依智、依不了義經不依了義經と談するに非ず乎。請ひ願くは心有らん人は思惟を加へよ。如來の入滅は既に二千二百餘の星霜を送れり。文殊迦葉阿難經を結集せし已後、四依の菩薩重ねて世に出て論を造り經の意を申ぶ。末の論師に至ては漸く誤り出來す。亦譯者に於ても梵漢未達の者有り。權教宿習の人は實の經論の義を曲げて權の經論の義を存す。之れに就て亦唐土の人師、過去の權教の宿習の故に權の經論心に協ふ間實の經論を用ひず。或は少し自義に違ふ文有れば理を曲て會通を構へ以て自身の義に協はしむ。設ひ後に道理と念ふと雖、或は名利に依り或は檀那の歸依に依て權宗を捨て實

宗に入らず。世間の道俗亦無智の故に、理非を辨へず。但だ人に依て法に依らず。設ひ惡法たりと雖、多人の邪義に隨て一人の實説に依らず。而に衆生の機多くは流轉に隨ひ、設ひ出離を求むとも亦多分は權經に依る。但だ恨らくは惡業の身善に付け惡に付け生死を離れ難き耳。然りと雖今の世の一切の凡夫、設ひ今生を損すと雖、上に出す所の涅槃經第九の文に依て且く法華涅槃を信ぜよ。其故は、世間の淺き事すら展轉多き時は虚は多く實は少し。況んや佛法の深義に於てを乎。如來の滅後二千餘年の間、佛經に邪義を副へ來り、萬に一も正義無き歟。一代の聖教多分誤り有る歟。所以に心地觀經の法爾無漏の種子。正法華經の屬累の經末。婆沙論の一十六字。攝論に識を八九に分つ、法華論と妙法華經との相違。涅槃論の法華煩惱に汚さるゝの文。法相宗の定性無性の不成佛。攝論宗の法華經の一稱南無の別時意趣。此等は皆譯者人師の誤り也。此外に四十餘年の經經に於て多くの誤り有る歟。設ひ法華涅槃に於て誤り有るも誤り無きも四十餘年の諸經を捨て法華涅槃に隨ふ可し。其證上に出し了ぬ。況や誤り有るの諸經に於て信心を致す者の生死を離る可けん耶。

大文の第二 正像末に就て佛法の興廢有ることを明かにす。  
 之れに就て二有り。一には爾前四十餘年の内の諸經と淨土の三部經と末法に於ての久住不久住を明かにし、二には法華涅槃と淨土の三部經並に諸經との久住不久住を明すなり。  
 第一に爾前四十餘年の内の諸經と淨土の三部經と末法に於ての久住不久住を明かにす。問云、如來

の教法は大小淺深勝劣を論せず、但時機に依て之を行せば、定て利益有る可き也。然るに賢劫、大衛、大集等の諸經を見るに、佛滅後二千餘年已後は佛法皆滅して但教のみ有て行證有る可らず。隨て傳教大師の末法燈明記を開くに、我が延曆二十年辛巳は一千七百五十歲也。一説。延曆二十年より已後亦四百五十餘歲也。既に末法に入れり、設ひ教法有りと雖行證無けん。然るに於ては佛法を行ずる者萬が一も得道有り難き歟。然るに雙觀經の當來の世經道滅盡せんに、我れ慈悲哀愍を以て特り此の經を留めて止住せんこと百歲ならん。其來生斯の經に値ふこと有らん者は意の所願に隨て皆得度すべし等の文を見るに。釋迦如來一代の聖教皆滅盡して後、唯特り雙觀經の念佛のみを留めて衆生を利益す可しと見えたりぬ。此の意趣に依て粗淨土家の諸師の釋を勘ふるに其意無きに非ず。道綽禪師は當今末法は是五濁惡世なり唯淨土の一門のみ有て通入す可き路なりと書るし。善導和尚は萬年に三寶滅し此の經のみ住すること百年なりと宣べ。慈恩大師は末法萬年に餘經悉く滅し彌陀の一教利物偏に増すと定め。日本國叡山の先德慧心僧都は一代聖教の要文を集め末代の指南を教ふる住生要集の序に云く、夫れ住生極樂の教行は濁世末代の目足也。道俗貴賤誰か歸せざる者あらん。但し顯密の教法其の文一に非ず。事理の業因具の行惟れ多し、利智精神の人は未だ難しと爲さす。了が如き頑魯の者豈に敢てせんや。乃至、次下に云く、就中念佛の教は多く末代經道滅盡して後の濁惡の衆生を利する計り也と。總じて諸宗の學者も此旨を存す可し。殊に天臺一宗の學者誰か此義に背く可き乎如何。答云、

爾前四十餘年の經々は各時機に隨て而も興廢あり。故に多分は淨土三部經より已前に滅盡有る可き歟。諸經に於ては多く三乘現身の得道を説く。故に末代に於ては現身得道の者之れ少れなり。十方の往生淨土は多くは末代の機に蒙らしむ。之れに就て西方極樂は、娑婆鄰近の故に、最下の淨土なる故に日輪東に出て西に没する故に、諸經に多く之を勸む。隨て淨土の祖師のみ獨り此義を勸むるに非ず。天臺妙樂等も亦爾前經に依る日は且く此の筋有り。亦獨り人師のみに非ず、龍樹天親も此の意有り。是れ一義なり。亦仁王經等の如きは、淨土の三部經より尙久く末法萬年の後八千年住す可しと也。故に爾前の諸經に於ては一定す可からず。

第二に法華涅槃と淨土三部經との久住不久住を明す。問云、法華涅槃と淨土三部經と何れが先に滅す可き乎。答云、法華涅槃より已前に淨土三部經は滅す可き也。問云、何を以て之を知るや。答云、無量義經に四十餘年の大部の諸經を擧げ了て、未顯眞實なりと云ふ。故に雙觀經等の特留此經の言、皆方便なり虛妄なり。華嚴方等般若觀經等の速疾歷劫往生成佛は無量義經の實義を以て之を檢ふるに。無量無邊不可思議阿僧祇劫を過れども終に無上菩提を成ずること得ず、乃至、險しき運を行くに留難多きが故と云へる經也。住生成佛俱に別時意趣也。大集雙觀經等任滅の先後は皆隨宜の一説也。法華經に來らざる前は彼の外道の説に同じ。譬へば江河の大海に趣かず民臣の大王に隨はざるが如し。身を苦しめ行を作すとも法華涅槃に至らば一分の利益無く、有因無果の外道なり、在

世滅後俱に教有て人無く、行有て證無き也。諸木は枯るゝと雖も松柏は萎まず。衆草は散ると雖も鞠竹は變ぜず。法華經も亦復是の如し。釋尊の三説、多寶の證明、諸佛の舌相偏に令法久住に在が故也。問云、諸經滅盡の後特り法華經のみを留む可き證文如何。答云、法華經の法師品に釋尊自ら流通せしめて云く。我が所説の經典無量千萬億にして已に説き今説き當に説かん。而も其中に於て此の法華經最も爲れ難信難解なり云云。文の意は、一代五十年已今當の三説に於て最も第一の經也。八萬聖教の中に殊に未來に留めんと欲すと説き給ひしなり。故に次の品に多寶如來は地より涌出し、分身の諸佛は十方より一處に來集し、釋迦如來は諸佛を御使と爲して、八方四百萬億那由陀の世界に充満せる菩薩二乘人天八部等を責て云く、多寶如來並に十方の諸佛涌出來集の意趣は偏に令法久住の爲め也。各三説の諸經滅盡の後に體かに未來五濁難信の世界に於し此經を弘めんと誓言を立よと。時に二萬の菩薩八十萬億那由陀の菩薩、各誓言を立て、云く。我れ身命を愛せず但だ無上道を惜む。千世界の微塵の菩薩、文殊等皆誓て云く、我等佛の滅後に於て、乃至、當に廣く此の經を説き奉るべし云云。其後佛十説を擧げ給ふ。其第一の論は川流江河を以て四十餘年の諸經に譬へ。法華經を以て大海に譬へ。末代濁惡無漸無愧の大早魁の時、四味の川流江河竭ると雖、法華經の大海は減少せず等説き了んぬ。次に正しく説て云く、我が滅度の後後の五百歳の中に廣宣流布し闍浮提に於て斷絶せしむること無けん」と定め了んぬ。つらく文の次第を按ずるに、我が滅度後の次の後の字は、四十餘年の諸經

滅盡の後の後の字なり。故に法華經流通の涅槃經に云く。應に無上の佛法を以て諸の菩薩に付すべし。諸の菩薩も善く能く問答するを以てなり。是の如き法實は則ち久住することを得て無量千世増益熾盛にして衆生を利安すべし已上。此の如き等の文は、法華涅槃は無量百歳にも絶ゆべからざる經也。此の義を知らざる世間の學者、大集權門の五百歳の文を以て此の經に同じ。淨土三部經より已前に滅盡す可しと存せる立義は、一經先後の起盡を忘れたる也。問云、上に擧ぐる所の曇鸞道綽善導慧心等の諸師、皆法華眞言等の諸經に於て末代不相應の釋を作る。之に依て源空並に所代の弟子、法華眞言等を以て雜行と立て、難行道と疎み。行者をば群賊惡衆惡見の人等と罵り。或は祖父の履に類し聖光。或は絃歌等にも劣る。房語。と云ふ。其意趣に尋ねれば偏に時機不相應の義を存する故也。此等の入師の釋如何之を會す可き乎。答之、釋迦如來一代五十年の説教、一佛の金言に於て權實二教を分け、權經を捨て實經に入らしむること佛語顯然也。此に於て、若但讀佛乘衆生没在苦の道理を恐れ、且らく四十二年の權經を説くと雖、若以小乘化乃至於一人我則墮慳貪の失を脱れんが爲め、入大乘爲本の義を存し、本意を遂げて法華經を説き給ふ。然るに涅槃經に至て、我れ滅度せば必ず四依を出して、權實二教を弘通せしめんと約束したんぬ。故に龍樹菩薩は如來の滅後八百年に出世して、十住毗婆沙等の權論を造て華嚴方等般若等の意を宣べ。大論を造て般若法華の差別を分つ。天親菩薩は如來の滅後九百年に出世して、俱舍論を造て小乘の意を宣べ。唯識論を造て方等部の意を宣べ。最後

に佛性論を造て法華涅槃の意を宣べて、了教不了教を分ち敢て佛の遺言に違はず。末の論師並に譯者の時に至ては、一向に權經に執する故に實經を會して權經に入れ權實雜亂の失出來せり。亦人師の時に至ては、各依憑の經を以て本と爲す故に餘經を以て權經と爲す、是れより彌々佛意に背く。而るに淨土の三師に於ては、鸞緯の二師は十住毗婆沙論に依て難易聖淨の二道を立つ。若し本論に違して法華真言等を以て難易の内にすれば信用に及ばず。隨て淨土論の註並に安樂集を見るに多分は本論の意に違せず。善導和尚は亦淨土三部經に依て彌陀稱名等の一行一願の往生を立る時。梁陳隋唐の四代の攝論師總して一代。聖教を以て別時の意と定むること。善導和尚の存念に違せる故に攝論師を破る時、彼の人を群賊等に譬ふ。順次往生の功德を賊する故に其所行を雜行と稱す。必ず萬行を以て往生の素懷を逐ぐる故をば此の人初むる故に千中無一と嫌へり。是故に善導和尚も雜行の言中に敢て法華真言等を入れず。日本國の源信僧都は亦叡山第十八代の座主慈慧大師の御弟子也。多くの書を造れども皆法華を弘めんが爲なり。而るに往生要集を造る意は、爾前四十餘年の諸經に於て往生成佛の二義有り。成佛の難行に對して往生易行の義を存し。往生の業の中に於て菩提心觀念の念佛を以て最上と爲す。故に大文第十の問答料簡の中、第七の諸行勝劣門に於ては念佛を以て最勝と爲し。次下に爾前最勝の念佛を以て法華經の一念信解の功德に對して勝劣を判する時、一念信解の功德は念佛三昧より勝ること百千萬倍なりと定め給へり。當に知るべし、往生要集の意は、爾前最上の念佛を以て法華最下

の功德に對して、人をして法華經に入らしめんが爲に造る所の書也。故に往生要集の後に一乘要決を造て、自心の内證を述る時法華經を以て本意と爲す。而るに源空並に所化の衆、此義を知らざる故に、法華真言を以て三師並に源信所破の難聖雜並に往生要集の序の顯密の中に入れて、三師並に源信を法華真言の謗法の人と作す。其の上日本國の一切の道俗を化し、法華真言に於て時機不相應の旨を習はしめ、在家出家の諸人に於て法華真言の結縁を留む。豈佛の記し給ふ所の惡世中比丘邪智心詭曲の人に非ず乎。亦則斷一切世間佛種の失を免る可き乎。其の上山門寺門東寺天臺並に日本國中法華真言等を習ふ諸人を群賊惡衆惡見の人等に譬ふる源空が重罪、何れの劫にか其の苦果を經盡す可けん乎。法華經の法師品に持經者を罵る罪を説て云く、若し惡人有て不善の心を以て一劫の中に於て現に佛前に於て常に佛を段罵せん其の罪尙輕し。若し一人一つの惡言を以て在家出家の法華經を讀誦する者を毀謗せん其の罪甚だ重し經文。一人の持者を罵る罪尙是の如し。況や書を造り日本國の諸人に罵らしむる罪を乎。何に況や此經を千中無一と定めて法華經を行する人に疑を生ぜしむる罪を乎。何に況や此經を捨て、觀經等の權經に遷しむる謗法の罪を乎。

願くば一切の源空が所化の四衆、頓に選擇集の邪法を捨て、忽に法華經に遷り今度阿鼻の炎を脱れよ。問云、正く源空か法華經を誹謗する證文如何。答云、法華經の第二に云く、若し人信せずして斯の經を毀謗せば則ち一切世間の佛種を斷ぜん經文。不信の相貌は人をして法華經を捨てしむればな

り。故に天親菩薩の佛性論の第一に此の文を釋して云く、若し大乘に憎背する者此れは是れ一闡提の因、衆生をして此の法を捨てしむるを爲の故也論文。謗法の相貌は此の法を捨てしむるが故也。選擇集は人をして法華經を捨てしむる書に非ず乎。闡提の二字は佛性論の憎背の二字に非ず乎。亦法華經誹謗の相貌は、四十餘年の諸經の如く小善成佛を以て別時意と定むる等也。故に天臺の釋に云く、若し小善成佛を信ぜずんば則ち世間の佛種を斷する也。妙樂重ねて此の義を宣て云く、此の經は遍く六道の佛種を開す。若し此の經を謗せば義斷に當る也。釋迦多寶十方の諸佛天親天臺妙樂の意の如くは源空は謗法の者也。所詮選擇集の意は、人をして法華真言を捨てしめんと定めて書き了ぬ。謗法の義疑ひ無き者也。

大文第三 選擇集 謗法の縁起を出す。

問云、何れの證據を以て源空を謗法の者と稱する乎。答云、選擇集の現文を見るに一代聖教を以て二に分つ。一には聖道難行難行。二には淨土易行正行なり。其の中に聖難難と云ふは、華嚴阿含方等般若法華涅槃大日經等なり取意。淨易正と云ふは、淨土の三部經の稱名念佛等取意。聖難難の失を判せば、末代の凡夫之を行せば百の時に希れに一二を得る。千の時に希れに三五を得ん。或は千が中に一も無し。或は群賊惡衆邪見惡見邪難の人等と定むる也。淨易正の得を判せば、末代の凡夫之を行せば十は即十生し百は即百生せん等也。謗法邪の義是れ也。問云、一代聖教を聖道淨土難行

易正行難行と分ち、其中に難聖難を以て時機不相應と稱すること。但だ源空一人の新義に非ず。曇鸞道綽善導の三師の義也。此れ亦此等の大師の私の按に非ず。其の源は龍樹菩薩の十住毗婆沙論より出たり。若し源空を謗法と稱せば龍樹菩薩並に三師を謗法の者と稱するに非ず乎。答云、龍樹菩薩並に三師の意は法華已前の四十餘季の經々に於て難易等の義を存す。而るを源空より已來龍樹並に三師の難行等の語を借りて、法華真言等を以て難難等の内に入れ。所化の弟子師の失を知らず、此の邪義を以て正義なりと存じ此の國に流布せしむる故に、國中の萬民悉く法華真言等に於て時機不相應の想ひを作す。其の上世間を食ばる天臺真言の學者、世の情に隨はんが爲めに法華真言等に於て時機不相應の惡言を吐き、選擇集の邪義を扶け、一旦の欲心に依り釋迦多寶並に十方の諸佛の御評定令法久住於閻浮提廣宣流布の誠言を壞り。一切衆生に於て一切三世十方諸佛の舌を切る罪を得せしむ。偏に是れ惡世の中の比丘は邪智にして心詭曲に未だ得ず爲れ得たりと謂ひ、乃至、惡鬼其身に入り、佛の方便隨宜所説の法を知らざるが故也。問云、龍樹菩薩並に三師法華真言等を以て難聖難の内に入れざるを源空私に之れを入るとは何を以て之を知る乎。答云、遠く餘處に證據を尋ね可きに非ず、即ち選擇集に之れ見えたり。問云、其の證文如何。答云、選擇集の第一の篇に云く、道綽禪師聖道淨土の二門を立て而して聖道を捨て、正しく淨土に歸するの文と約束して、次下に安樂集を引く私の料簡の段に云く、始に聖道門とは之に就て二有り。一には大乘、二には小乘なり。大乘の中に

就て顯密權實等の不同有りと雖、今此の集の意は唯顯大及び權大に存す。故に歷劫迂回の行に當る。之に準じて之を思ふに、應に密大及び實大を存すべし已上。選擇集の文也。此の文は意は、道緯禪師の安樂集の意は、法華已前の大小乘經に於て聖道淨土の二門を分つと雖。我れ私に法華真言等の實大密大を以て四十餘季の權大乘に同して聖道門と稱すと準之思之の四字是れ也。此の意に依るが故に、亦疊鸞の難易二道を引く時、私に法華真言を以て難行道の中に入れ。善導和尚の正難二行を分つ時も亦私に法華真言を以て難行の内に入る。總して選擇集十六段に亘て無量の謗法を作す根源は偏に此の四字より起る。誤りなる哉、畏しき哉。爰に源空の門弟師の邪義を救て云く、諸宗の常の習ひ、設ひ經論の證文無しと雖、義類の同きを聚めて一處に置く。而も選擇集の意も、法華真言等を集めて難行の内に入れ正行に對して之を捨つ。偏に經の法體を嫌ふには非ず、但だ風勢無き末代の衆生を常没の凡夫と定め、此の機に易行の法を撰む時稱名念佛を以て其の機に當て易行の法を以て諸教に勝ると立つ。權實淺深等の勝劣を詮するに非ず。難行と云ふは嫌て難と云ふには非ず、難と云ふは不純を難と云ふなり。其上諸の經論並に諸師も此の意無きに非ず。故に叡山の先德往生要集の意偏に是の義也。所以に、往生要集の序に云く、顯密の教法は其の文一に非ず。事理の業因其の行惟れ多し。利智精進の人は未だ爲れ難からず。予が如き頑魯の者豈敢てせん。是の故に念佛の一門に依る云云。此の序の意には、慧心先德も法華真言等を破るに非ず。但だ偏に我等魯頑の者の機に當て

法華真言は聞き難く行じ難きが故に、我が身鈍根なる故なり、敢て法體を嫌ふには非ず。其の上序より已外正宗に至るまで十門有り。大文の第八門に述て曰く、今念佛を勤むることは是れ餘の種々の妙行を遮するに非ず、只是れ男女貴賤行住坐臥を簡はず、時處諸縁を論せず、之を修するに難からず。乃至、臨終には往生を願求するに其便宜を得ること念佛には如かず已上。此等の文を見るに、源空が選擇集と源信の往生要集と一卷三卷の不同有りと雖、一代聖教の中には易行を撰て末代の愚人を救はんと欲する意趣は但同じ事なり。源空上人真言法華を難行と立て、要道に墮せば、慧心先德も亦此の失を免る可からず如何。答云、汝師の謗法の失を救はんが爲に、事を源信が往生要集に寄するは。謗法の上に彌々重罪を招く者也。其の故は、釋迦如來五十季の説教に、總して先き四十二季の意を無量義經に定めて云く、行於險逕多留難故。無量義經已後を定むるに曰く、行大直道無留難故。佛自ら難易勝劣の二道を分給ふ。佛より外か等覺已下末代の凡師に至るまで、自義を以て難易の二道を分け此の義に背く者は外道魔王の説に同じからん。隨て四依の大士龍樹菩薩の十住毗婆沙論には、法華已前に於て難易の二道を分ち。敢て四十餘季已後の經に於て難行の義を存せず、其の上若し修し易きを以て易行と定めば、法華經五十展轉の行は稱名念佛より行じ易きこと百千萬億倍也。若し亦勝を以て易行を定めば、分別功德品の爾前四十餘季の八十萬億劫の間の檀戒忍進念佛三昧等先きの五波羅密の功德を以て法華經の一念信解の功德に比するに、一念信解の功德は念佛三昧等の先きの五



羅密に勝る、こと百千萬億倍なり。難易勝劣と謂ひ、行淺功深と謂ひ觀經等の念佛三昧を法華經に比するに難行の中の極難行、勝劣の中の極劣也。其の上悪人愚人を扶くること亦教の淺深に依る。阿含十二年の戒門には、現身に四重五逆の者には得道を許さず。華嚴方等般若雙觀經等の諸經は、阿含經より教深き故に觀門の時重罪の者を攝すと雖、猶戒門の日は七逆の者に現身受戒を許さず。然りと雖決定性の二乘無性闡提に於ては戒觀共に之を許さず。法華涅槃等には唯五逆七逆謗法の者を攝するのみに非ず。亦定性無性を攝す。就中、末代に於ては常沒闡提之れ多し、豈觀經等の四十餘年の諸經に於て之を扶く可し乎。無性の常沒決定性の二乘は但法華涅槃等に限り。四十餘年の經に依る人師は彼の經の機を取る、此人は未だ教相を知らざる故也。但し往生要集は一往序の文を見る時は法華真言等を以て顯密の内に入れて、殆ど末代の機に協はずと書すと雖、文に入て委細に一部三卷の始末を見るに。第十の問答料簡の下に、正く諸行の勝劣を定むる時、觀佛三昧、般舟三昧、十住毗婆沙論、寶積、大集等爾前の經論を引て一切の萬行に對して念佛三昧を以て王三昧と立て了ぬ。最後の一の問答有り、爾前の禪定念佛三昧を以て法華經の一念信解に對するに百千萬億倍劣ると定む。復問を通する時、念佛三昧を萬行に勝ると云ふは爾前の當分也。云云。當に知るべし、慧心の意は、往生要集を造て末代愚なる機を調のへ法華經に入が爲め也。例せば佛四十餘年の經を以て權機を調のへ法華經に入れ給ひし如き也。故に最後に一乘要決を造る。其の序に云く、諸乘の權實は古來の詩

也。俱に經論に據て互に是非を執す。余寬弘丙午の歲冬十月、病中歎て曰く、佛法に遇ふと雖佛意を了せず、若し終に手を空せば後悔何ぞ追ん。爰に經論の文義賢哲の章疏、或は人をして尋ねしめ、或は自も思擇し、全く自宗佗宗の偏黨を捨て、專權智實智の深奥を探り、終に一乘眞實の理五乘方便の説を得る者也。既に今生の隙を開く、何ぞ夕死の恨を遺さん已上。此の序の意は、偏に慧心の本意を顯はす也。自宗佗宗の偏黨を捨てん時、淨土の法門を捨てざらん乎。一乘眞實の理を得る時、専ら法華經に依るに非ず乎。源信僧都は永觀二年甲申の冬十一月往生要集を造り。寬弘丙午の冬十月の比一乘要決を作る。其の中間二十餘年なり。權を先きにし實を後にす、宛も佛の如く。亦龍樹天親天喜等の如し。汝往生要集を便りと爲して師の謗法の失を救はんと欲すれども、敢て其の義類に似す。義類同きを以て一處に聚むとは同等の義類同なる乎。華嚴經の如きは二乘界を隔つる故に十界互具無し。方等般若の諸經は亦十界互具を許さず。觀經等の往生極樂も亦方便の往生也。成佛往生俱に法華經の如き往生に非ず、皆別時意趣の往生成佛也。其の上源信僧都の意は、四威儀に行し易き故に念佛を以て易行と言ひ、四威儀に行し難き故に法華を以て難行と稱せば、天台妙樂の釋を破る人也。所以は、妙樂大師は末代の鈍者無智の者等法華經を行するに普賢菩薩並に多寶十方の諸佛を見奉るを易行と定めて云く。散心に法華を誦し禪三昧に入らずとも、坐立行に一心に法華の文字を念せよ已上。此の釋の意趣は偏に末代の愚者を攝せんが爲めなり。散心とは、定心に對する語也。誦法華と

は、八卷一巻一字一句一偈題目、一心一念隨喜の者五十展轉等也。坐立行とは四威儀を嫌はざる也。一心とは、定の一心に非ず。理の一心にも非ず散心の中の一也。念法華文字とは、此の經は諸經の文字に似ず、一字を誦すと雖八萬寶藏の文字を含み、一切諸佛の功德を納る也。天臺大師の玄義の八に云く、手に卷を執らずとも常に是の經を讀み、口に言聲無けれども偏く衆典を誦じ、佛說法せざれども恒に梵音を聞き、心に思惟せざれども普く法界を照す已上。此の文の意は、手に法華經一部八卷を執らざれども、是の經を信する人は晝夜十二時の持經者也。口に讀經の聲を出さざれども、法華經を信する者は日日時時念念に一切經を讀む者也。佛の入滅は既に二千餘年を経たり。然り雖法華經を信する者の許に佛の音聲を留て、時時刻刻念念に我れ死せざる由を聞かむるなり。心に一念三千を觀せざれども偏く十方法界を照す者也。此等の徳は偏に法華經を行する者に備はれる也。是の故に法華經を信する者は、設ひ臨終の時、心に佛を念せず、口に經を誦せず、道場に入らずとも、心無くして法界を照し、音無くして一切經を誦し、卷軸を取らずとも法華經八卷を奉る徳之れ有り。是れ豈權教の念佛者が臨終正念を期して十念の念佛を唱へんと欲する者に百千萬倍勝るゝの易行に非ず乎。故に天臺大師の文句の十に云く、都て諸教に勝る故に隨喜功德品と言ふ。妙樂大師は、法華經は諸經より淺機を取る、而るを人師此の義を辨へざる故に法華經の機を深く取る事を破して云く、恐くは人謬り解せん者初心の功德の大なることを測らずして、功を上位に推りて此初心を蔑る。故に今彼の

行は淺く功の深きことを示して以て經力を顯はす已上。以顯經力の釋の意趣は、法華經は觀經等の權經に勝れたる故に、行淺功深は淺機を攝する故也。若し慧心先徳法華經を以て念佛より難行と定め思者頭魯の者を攝せすと云はば、恐らくは違路伽陀の罪を招かざらん乎。亦恐人謬解の内に入らざらん乎。總して天臺妙樂の三大部の本末の意には、法華經は諸經に漏れたる愚者惡人女人常沒聞提等を攝し給ふ。佗師佛意を覺らざる故に、法華經を諸經に同じ、或は地住の機に取り、或は凡夫に於ても別時意趣の義を存す。此等の邪義を破て人天四惡を以て法華經の機と定め種類相對を以て過去の善惡を取む。人天に生ずる人豈過去の五戒十善無らん乎と定了ぬ。若し慧心此の義に背かば、豈天臺宗を知らる人ならん乎。而るを源空深く此の義に迷ふ故に、往生要集に於て僻見を起し自ら失し佗をも誤まる者也。道に宿善有て實教に入りながら、一切衆生を化して權教に還へらしめ利へ實教を破せしむ豈惡師に非ず乎。彼の久遠下種大通結縁の者の五百三千の塵點を經るが如きは、法華の大教を捨て爾前權小に遷る故に、後には權經をも捨て六道に回しなり。不輕輕毀の衆の千劫阿鼻地獄に墮せしは權師を信じて實經を弘むる者を誹謗を作したる故也。而るに源空我が身唯實經を捨て權經に入るのみならず、人を勸め實經を捨て權經に入らしめ。亦權人をして實經に入らしめず。利へ實經の行者を罵るの罪永劫浮み難からん。問云、十住毗婆沙論は一代の通論也。難易の二道の内に何ぞ法華真言涅槃を入れざらん乎。答云、一代の諸大乘經に於て、華嚴經の如きは初頓後分有り。初頓の華嚴は二乘

の成不成を論せず。方等部の諸經には一向二乘無性闡提の成佛を斥ふ。般若部の諸經も之に同じ。總して四十餘年の諸大乘經の意は、法華涅槃大日經等の如く二乘無性の成佛を許さず。此等を以て爾前法華の相違を檢ふるに水火の如し。滅後の論師龍樹天親も亦俱に千部の論師也。所造の論に通別の二論有り、通論に於ても亦二有り。四十餘年の通論と、一代五十年の通論と也。其の差別を分つに、決定性の二乘無性闡提の成不成を以て論の權實を定むる也。而るに大論は龍樹菩薩の造、羅什三藏の譯なり。般若經に依る時は二乗作佛を許さず。法華經に依れば二乗作佛を許す。十住毗婆沙論も亦龍樹菩薩の造、羅什三藏の譯なり。此の論も亦二乗作佛を許さず。之を以て知ぬ、法華已前の諸大乘經の意を申たる論也。問云、十住毗婆沙論の何れの處に二乗作佛を許さざる文を出したる乎。答云、十住毗婆沙論の第五に云く龍樹菩薩の譯若し聲聞地及び辟支佛地に墮する是を菩薩の死と名く則ち一切の利を失ふ。若し地獄に墮すとも是の如き畏れを生ぜず。若し二乘地に墮すれば則ち大怖畏を爲す。地獄の中に墮すれども畢竟して佛に至ることを得。若し二乘地に墮すれば畢竟して佛道を遮す已上。此の文二乗作佛を許さず、宛も淨名等の於佛法中以如敗種の文の如し。問云、大論に般若經に依ては二乗作佛を許さず、法華經に依ては二乗作佛を許すの文如何。答云、大論の一百に曰く龍樹菩薩の造、問云く、更に何等の法が甚深にして般若に勝れたる者有れば、而も般若を以て阿難に屬累し、餘經を菩薩に屬累するや。答云、般若波羅密は秘密の法に非ず。而も法華等の諸經は阿羅漢の受決作佛を説く

所以に大菩薩のみ能く受持し用ふ。譬へば大藥師の能く毒を以て藥と爲すが如し。亦九十三に云、阿羅漢の成佛は論義者の知る所に非ず。唯佛のみ能く了し給ふ已上。此等の文を以て之を思ふに。論師の權實は宛も佛の權實の如し。而るを構經に依る人師長りに法華等を以て觀經等の權説に同じ。法華涅槃等の義を假り淨土三部經の徳と作し、決定性の二乘無性闡提常没等の往生を許す。權實雜亂の失脱れ難し。例せば外典の儒者の内典を賊んで外典を莊るが如し。謗法の失免れ難き歟。佛自ら權實を分け給ふ其の詮を探るに、決定性の二乘無性有情の成不成是れ也。而るに此の義を辨へざる譯者、爾前の經經を譯する時二乗作佛無性成佛を許す。此の義を知る譯者は、爾前の經を譯する時二乗作佛無性成佛を許さず。之に依て佛意を覺らざる人師も、亦爾前の經に於て決定生無性の成佛を明すと見て法華爾前同き思ひを作し。或は爾前の經に於て決定無性を嫌ふ文を見て、此義を以て了義經と爲し法華涅槃を以て不了義經と爲す。共に佛意を覺らず權實二經に迷へり。此等の誤りを出さば但源空一人に限るのみに非ず。天竺の論師並に譯者より唐土の人師に至るまで其の義有り。所謂地論師攝論師が一代の別時意。善導懷感の法華經の二稱南無佛の別時意。此等は皆權實を辨へざる故に出來する處の誤り也。論を造る菩薩、經を譯する譯者、三昧發得の人師、猶以て是の如し、如何に況や末代の凡師に於ておや。問云、汝末學の身に於て論師並に譯者人師を破する乎。答云、敢て此の難を致すこと勿れ。攝論師並に善導等の釋は、權實二教を辨せず猥りに法華經を以て別時意と立つ。故

に天臺妙樂の釋と水火を作す間、且く人師の相違を聞いて經論に付て是非を検ふる時、權實二教は佛説より出でたり。天親龍樹重て之を定む。此義に順する人師を且く之を仰ぎ。此義に順せざる人師は且く之を用ひず。敢て自義を以て是等を定むるに非ず、但相違を出す計り也。

大文第四 謗法の者を對治す可き證文を出だす。

此れに二有り。一には佛法を以て國王大臣並に四衆に付屬することを明し。二には正しく謗法の人王地に處をば對治す可き證文を明す。

第一に佛法を以て國王大臣並に四衆に付屬することを明すとは、仁王經に云、佛波斯匿王に告げ給はく、乃至、是の故に諸の國王に付屬して、比丘比丘尼清信男清信女に付屬せず。何を以ての故に。王の威力無きが故に。乃至、此の經の三寶は諸の國王四部の弟子に付屬す已上。大集經の二十八に云、若し國王有て我が法の滅せんを見て擁護せざれば、無量世に於て、施戒慧を修すとも悉く皆滅失し、其國に三種の不祥事を出さん。乃至、命終して大地獄に生ぜん已上。仁王經の文の如きは、佛法を以て先づ國王に付屬し次に四衆に及ばす。王位に居る君、國を收る臣、先づ佛法を以て先きと爲し國を治む可き也。大集經の文の如きは、王臣等佛道の無めに無量劫の間頭目等の施を施し八萬の戒行を持ち無量の佛法を學すと雖、國に流布する所の法の邪正を直さざれば。國中に大風早颯大雨の三災起りて、萬民を逃脫せしめ、王臣定めて三惡に墮せん。亦雙林最後の涅槃經第三に云、今正法を以て諸

王大臣宰相比丘比丘尼優婆塞優婆夷に付屬す。乃至、法を護らざる者をば禿居士と名く。又云く、善男子、正法を護持せん者五戒を受けず威儀を修せずして、まさに刀劍弓箭鎗架を持すべし。又云く、五戒を受けざれども正法を護るを爲、乃ち大乘の人と名く、正法を護る者はまさに刀劍器械を執持すべし云云。四十餘年の内にも、梵網等の戒の如きは國王大臣の諸人等も一切の刀杖弓箭才斧鬪戰の具を畜ふることを得ず。若し此を畜ふる者は定て現身に國王の位比丘比丘尼の位を失ひ、後生三惡道の中に墮す可しと定め了んぬ。而るに今世は道俗を擇ばず弓箭刀杖を帶せり。梵網經の文の如くならば必ず三惡道に墮んこと疑ひ無き者也。涅槃經の文の無くんば如何にして之を救はん。亦涅槃經の先後の文の如くならば、弓箭刀杖を帶して惡法の比丘を治し正法の比丘を守護せん者は、先世の四重五逆を滅じ、必ず無上道を證せんこと定め給ふ。亦金光明經の第六に云く、若し人有て其國土に於て此經有りて雖、未だ嘗て流布せず、捨離の心を生じ聽聞せんことを樂はず、亦供養し尊重し讚歎せず。四部の衆持經の人を見て、亦復尊重し乃至供養すること能はず。遂に我等及び餘の眷屬無量の諸天をして此の甚深の妙法を聞くことを得ず。甘露の味ひに背き、正法の流を失ひ、威光及び勢力有ること無からしめ、惡趣を増長して人天を損滅し、生死の河に墜ちて涅槃の路に乗かん。世尊、我等四王並に諸の眷屬及び藥叉等、此の如き事を見て其國土を捨て擁護の心無けん。但我等のみ是の王を捨棄するに非ず。亦無量の國土を守護する諸天善神あらんも皆悉く捨去せん。既に捨離し已りなば其國當

に種々の災禍有て國位を喪失すべし。一切の人衆皆善心無けん。唯繫縛、殺害、嗔諍のみ有て、互に相譏諂して辜無きに及ばさん。疾疫流行し、彗星敷出て、雨の日並ひ現じ薄蝕恆無く、黑白の二の紅不祥の相を表はし、星流れ地動き井の内に聲を發ん、暴雨惡風時節に依らず、常に飢饉に遭ふて苗實も成らず、多く佗力の怨賊有て國內を侵掠し、人民諸の苦惱を受け、土地可樂の處有ること無けん已上。此の經文を見るに、世間の安穩を祈らんに而して國に三災起らば惡法流布する故なりと知る可し。而るに當世は隨分國土安穩を祈ると雖、正嘉元年には大地大に動じ、同二年に大雨大風苗實を失へり。定て國を喪ばす惡法此の國に有るかと勘ふる也。選擇集の戒段に云く、第一に讀誦雜行とは、上の觀經等の往生淨土の經を除いて已外、大小顯密の諸經に於て受持讀誦するを悉く讀誦雜行と名くと書き了て、次に書て云、次に二行の得失を判せは、法華真言等の雜行は失、淨土三部經は得也。次に善導和尚の往生禮讚の十即十生百即百生千中無一の文を書き載せて云、私に云く、此の文を見るに、彌須らく難を捨て專を修すべし。豈百即百生の專修正行を捨て堅く千中無一の難修雜行を執せん乎。行者能く之を思量せよ已上。此等の文を見るに、世間の道俗豈者經を信す可けん乎。次に亦法華經等の雜行と念佛の正行との勝劣難易を書き定めて云く、一には勝劣の義、二には難易の義也。初に勝劣の義とは、念佛は是れ勝、餘行は是劣也。次に難易の義とは、念佛は修し易く、諸行は修し難し。亦次下に法華真言等の失を定めて云く、故に知りぬ、諸行は機に非ず時を失ふ。念

佛往生のみ機に當り時を得たり。亦次下に法華真言等の雜行の門を閉ちて云、隨佗の前には暫く定散の門を開くと雖、隨自の後には還て定散の門を閉つ。一たび開いて以後永く閉ちざるは誰是念佛の一門也已上。最後の本懷に云く、夫れ速に生死を離れんと欲せば二種の勝法の中に且らく聖道門を開いて撰んで淨土門に入れ。淨土門に入らんと欲せば正雜二行の中に且らく諸の雜行を抛うちて撰んで正行に歸すべし已上。門弟此の書を傳へて日本六十餘州に充滿する故に、門人世間無智の者に語て云く上人智慧第一の身と爲て此の書を造り眞實の義を定む。法華真言の門を閉ちて後に開くの文無く、抛うちて後に還て取るの文無し等立つる間、世間の道俗一同に頭を傾け。其義を訪ふ者には假字を以て選擇の意を宣べ。或は法然上人の物語を書す間、法華真言に於て難を付け。或は去年の曆祖父の履に誓へ、或は法華經を讀むは管絃より劣ると。是の如き惡書國中に充滿する故に法華真言等國に在りと雖聽聞せんことを樂はず。偶々行する人有りと雖、尊重を生ぜず。一向念佛は法華等の結縁を作すをば往生の障りと成ると云ふ故に捨離の意を生ず。此の故に諸天妙法を聞くことを得ず、法味を嘗めざれば威光勢力有ること無く。四天王並に眷屬此の國を捨て、日本國守護の善神も捨離し己んぬ。故に正嘉元年大地大いに震ひ。同二年に、春の大雨露を失ひ、夏の大旱魃に草木を枯し、秋の大風に果實を失ひ、飢渴忽ち起て萬民逃脱せしむること、金光明經の文の如し。豈選擇集の失に非ず乎。佛語虛しからず故に惡法の流布有て既に國に三災起れり。而るに此の惡義を對治せずんば佛の所説の三惡

を脱る可けん乎。而るに近年より予我不愛身命、但惜無上道の文をみる間、雪山常啼の心を起し、命を大乘の流布に替へ強言を吐て云く、選擇集を信じて後世を願はんの人は無限地獄に墮つ可しと。その時法然上人の門弟、選擇集に於て上に出す所の惡義を隠し、或は諸行往生を立て、或は選擇集に於て法華真言等を破せざる由を稱し。或は在俗に於て選擇集の邪義を知らしめざらんが爲に安語を構て云く、日蓮は念佛を稱する人を三惡道に墮つと云ふと。問云、法然上人の門弟諸行往生を立てつるに失有りや否や。答云、法然上人の門弟と稱し諸行往生を立てるは逆路伽耶陀の者也。當世も亦諸行往生の義を立て、而も内心には一向念佛往生の義を存し、外には諸行不謗の由を聞かしむる也。抑々此の義を立てる者、選擇集の法華真言等に於て失を付け、捨閉閣拋、群賊邪見惡見邪雜人、千中無一等の語を見ざるや否乎。

第二に正く謗法人の王地に處るを對治す可き證文を出す。涅槃經の第三に云く、懈怠にして戒を破し正法を毀る者せば、王者大臣四部の衆まさに苦治すべし。善男子、是の諸の國王及び四部の衆は當に罪有りや不也。世尊、善男子、是の諸の國王及び四部の衆は尙罪有ること無し。又第十二に云く、我れ往昔を念ふに、閻浮提に於て大國の王と作て名を仙豫と曰ひき。大乘經典を愛念し、敬重して、其の心純善にして蠱惡嫉妬愆愆有ること無かりき。乃至、善男子、我れ爾の時に心に大乘を重んず。婆羅門の方等を誹謗するを聞き、聞き已つて即時に其の命根を斷じき。善男子、是の因縁

を以て是れより以來地獄に墮せず已上。問云、梵網經の文を見るに、比丘等の四衆を誹謗するは波羅夷罪也。而るに源空謗法の失を顯すは豈阿鼻の業に非ず乎。答云、涅槃經の文に曰く、迦葉菩薩世尊に言さく、如來何が故ぞ彼當に阿鼻地獄に墮すべしと記するや。善男子、善星比丘は多く眷屬有り皆善星は是阿羅漢なり是道果を得つと謂へり。我れ彼が惡邪の心を壞らんと欲する故に、彼の善星は放逸を以て地獄に墮せりと記す已上。此の文に放逸とは謗法の名也。源空亦彼の善星が如く謗法を以ての故に無間に墮す。所化の衆此の義を知らざる故に源空を以て一切智人と號し、或は勢至菩薩或は善導の化身なりと云ふ。彼の惡邪の心を壞らん爲めの故に謗法の根源を顯はす。梵網經の説は謗法者の外の四衆也。佛誡めて云、謗法の人を見て其失を顯はされば佛弟子に非ずと。故に、涅槃經に云、我が滅度の後其の方面に隨つて持戒の比丘有て威儀具足し正法を護持せん。法を壞る者を見て即能く駭遣し呵責し徵治せよ。當に知るべし是の人は福を得んこと無量にして稱計す可からず。亦云はく、若し善比丘法を壞る者を見て置て呵責し駭遣し舉處せずんば。當に知るべし是の人は佛法の中の怨也。若し能く駭遣し呵責し舉處せば是れ我が弟子眞の聲聞也。予佛弟子の一分に入らんが爲に此の書を造り、謗法の失を顯はし世間に流布す。願はくば十方の佛陀此の書に於て力を副へ、大惡法の流布を止め一切衆生の謗法を救はしめ給へ。

大文第五 善知識並に眞實の法に値ひ難きことを明す。

之に付て三有り、一には受け難き人身値ひ難き佛法なることを明し、二には受け難き人身を受け値ひ難き佛法に値ふと雖、惡知識に値ふが故に三惡道に墮することを明し。三には正く末代凡夫の爲めの善知識を明す。

第一に受け難きは人身値ひ難きは佛法なることを明す。涅槃經の三十三に云、爾の時に世尊地の少しき土を取て之を爪の上に置き迦葉に告げて云く、是の土多き耶、十方世界の地の土多き乎、迦葉菩薩佛に白して云く、世尊、爪の上の土は十方所有の土に比べざる也。善男子、人有り身を捨て還て人身を得、三惡の身を捨てて人身を受ることを得、諸根完具し、中國に生じ、正信を具足して能く道を修習し、道を修習し已て能く正道を修し、正道を修し已て能く解脱を得、解脱を得已て能く涅槃に入るは、爪の上の土の如く。人身を捨て已て三惡の身を得、三惡の身を捨て三惡の身を得、諸根具せず、邊地に生じ、邪倒の信を信じて邪道を修習し、解脱常樂の涅槃を得ざるは、十方世界所有の地土の如く。此の文は多く法門を集めて一具と爲せり。人身を捨て還て人身を受くるは爪の上の土の如く。人身を捨て三惡道に墮つるは十方の土の如し。三惡の身を捨てて人身を受るは爪の上の土の如し。三惡の身を捨て還て三惡の身を得るは十方の土の如し。人身を受るは十方の土の如く。人身を受けて六根缺けざるは爪の上の土の如し。人身を受けて六根缺けざるは爪の上の土の如く。中國に生ずるは爪の上の土の如し。中國に生ずるは十方の土の如く。佛法に値ふは爪の上の土の如くなり。又

曰く、一闡提と作らず、善根を斷せず、是の如き等の涅槃經典を信ずるは。爪の上の土の如く。及至一闡提と作て、諸の善根を斷じ、是の經を信せざる者は、十方界の所有の地土の如く。此の文の如きは、法華涅槃を信せずして一闡提と作るは十方の土の如く。法華涅槃を信ずるは爪の上の土の如し。此の經文を見て彌々感涙拘へ難し。今日本國の諸人を見聞するに多分は權教を行す。設ひ身口には實經を行すと雖、心には亦權教を存す。故に天台大師摩訶止の五に云、其れ癡鈍なる者は毒氣深く入て本心を失ふが故に。既に其れ信ぜざれば則ち手に入らず。及至、大罪聚の人也。及至、設ひ世を厭ふ者も不劣の乘を翫そび枝葉に攀附し、狗作務に狎れ獼猴を敬て帝釋と爲し、瓦礫を崇んて是れ明珠なりとす。此れ黒闇の人なり。豈道を論す可けん已上。源空並に所化の衆、深く三毒の酒に酔て大通結縁の本心を失ひ、法華涅槃に於て不信の思を作して一闡提と作り。觀經等の下劣の乘に依て方便稱名等の瓦礫を翫び、法然房の獼猴を敬て慧慧、第一の帝釋と思ひ。法華涅槃の如意珠を捨て如來の聖教を稱するは權實二教を辨へざるが故也。故に弘決の第一に云く、此の圓頓を宗重せざるは、良に近代大乘を習ふ者の雜濫するに由る故也。大乘に於て權實二教を辨へざるを雜濫と云ふ也。故に末代に於て法華經を信する者は爪の上の土の如く、法華經を信せずして權教に墮落する者は十方の微塵の如し。故に妙樂歎いて云く像末は情澆く信心寡薄にして、圓頓の教法藏に溢れ函に盈れども暫くも思惟せず便ち瞑目に至る、徒らに生じ徒らに死す一に何ぞ痛しき哉已上。此の釋は偏に妙樂大師權者

たるの間、遠く日本國當代を鑒みて記し置く所の未來記也。問云、法然上人の門弟内にて一切經藏を安置し法華經を行する者有り、何ぞ皆誦法の者と稱せん乎。答云、一切經を開き見、法華經を讀て、難行道の由を稱し、選擇集の惡義を扶けんが爲にす。經論を開くに付て彌々誦法を増すこと。例せば善星が十二部經提婆達多が六萬藏の如し。智者の由を稱し自身を重んじ惡法を扶けんが爲め也。第二に受け難き人身を受け値ひ難き佛法に値ふと雖、惡知識に値ふが故に三惡道に墮することを明かすとは、佛藏經に云く、大莊嚴佛の滅後に五比丘あり。一人は正道を知て多億の人を度し。四人は邪見に住す。此の四人命終して後阿鼻地獄に墮ち。仰ぎ臥し、伏しに臥し、左脇に臥し、右脇に臥し、各九百萬億歲なり。及至、若くは家出家家の此の人に親近せし、並に諸の檀越凡そ六百四萬億の人と、此の四師と俱に生じ俱に死し大地獄に在て諸の燒煮を受く。大劫若し盡きぬれば是の四惡人及び六百四萬億の人、此の阿鼻地獄より轉じて他方の大地獄の中に生ず已上。涅槃經の三十三に云く、爾時に城中に一の尼乾有り、名を苦得と曰ふ。及至、善星苦得に問ふ、答て曰、我れ食吐鬼の身を得たり。善星、諦かに聽け。及至、爾の時に善星、即ち我が所に還て是の如き言を作す。世尊、苦得尼乾は命終の後に三十三天に生ぜり。及至、爾時に如來即ち迦葉と善星の所に往き給ふ。善星比丘遙かに我が來るを見、見已り即ち惡邪の心を生ず。惡心を以ての故に生身に陥ち入て阿鼻地獄に墮す已上。善星比丘は佛の菩薩たりし時の御子也。佛に隨ひ奉り出家して十二部經を受け、欲界の煩惱を壞て

四禪定を獲得せり。然りと雖、惡知識たる苦得外道に値て佛法の正義を信ぜざるに依て、出家受戒十二部經の功德を失ひ生身に阿鼻地獄に墮す。苦岸等の四比丘に親近せし六百四萬億の人は、四師と俱に十萬の大阿鼻地獄を経し也。今世の道俗は選擇集を貴ぶ故に、源空が影像を拜して一切經難行の邪義を讀む。例せば尼乾が所化の弟子尼乾が遺骨を禮して三惡道に墮ちしが如し。願はくば今世の道俗選擇集の邪正を知て後に供養恭敬を至せ。爾らずんば定て後悔有ん。涅槃經に云く、菩薩摩訶薩、惡象等に於ては心に怖畏すること無し。惡知識に於ては怖畏の心を生ぜよ。何を以ての故に。是の惡象等は唯能く身を壞て心を壞ること能はず。惡知識は二俱に壞るが故に。是の惡象等は唯一身を壞り。惡知識は無量の善身と無量の善心を壞る。是の惡象等は商能く不淨の臭き身を破壞す。惡知識は能く淨身及び淨心を壞る。是の惡象等は能く肉身を壞り。惡知識は法身を壞る。惡象の爲めに殺れては三趣に至らず。惡友の爲めに殺るれば必ず三惡に至る。是の惡象等は但身の怨と爲る。惡知識は善法の怨と爲らん。是の故に菩薩常に當に諸の惡知識を遠離すべし已上。請らくは今世の道俗、設ひ此の書を邪義なりと思ふと雖、且く此念を抛うちて十住毗婆沙論を開いて其の難行の内法華經の入不入を檢がへ。選擇集の準之思之の四字を按じて後に是非を致せ。謬て惡知識を信じ邪法を習ひ此の生を空すること莫れ。

第三に正く末代の凡夫の爲めに善知識を明す。問云、善財童子は五十餘の知識に値ひき、其の中に



普賢文殊觀音彌勒等有。常啼、班足、妙壯嚴、阿闍世等は曇無竭、普明、耆婆、二子、夫人に値ひ奉りて生死を離れたり。此等は皆大聖也。佛世を去り給ふの後はの如きの師を得ること難しと爲す。滅後に於て亦龍樹天親も去りぬ。天臺南岳にも値はず。如何ぞ生死を離る可けん乎。答云、末代に於て眞實の善知識有り。所謂法華涅槃是れ也。問云、人を以て善知識と爲すは常の習ひ也。法を以て知識を爲す證有り乎。答云、人を以て知識と爲すは常の習ひ也。然りと雖、末代に於ては眞の知識無し、法を以て知識と爲すに多くの證有り。摩訶止觀に云く、或は知識に従ひ、或は經卷に従て、上に説く所の一實の菩提を聞く已上。此文の意は、經卷を以て善知識と爲すなり。法華經に云く、若し法華經閣浮提に行じ受持すること有らん者は、此の念を作すべし。皆是れ普賢威神の力なり已上。此の文の意は、末代の凡夫法華經を信するは普賢善知識の力也。又云く、若し此の法華經を受持し讀誦し正憶念じ修習し書寫すること有らん者は、當に知るべし是の人は則ち釋迦牟尼佛を見るなり。佛の口より此の經典を聞くが如し。當に知るべし是の人は釋迦牟尼佛を供養するなり已上。此の文を見るに法華經は釋迦牟尼佛也。法華經を信せざる人の前には釋迦牟尼佛入滅を取り。此の經を信する者の前には滅後たりと雖、佛在世し給ふ也。又云く、若し我れ成佛して滅度の後十方の國土に於て法華經を説く處有らば、我が塔廟是の經を聽かんが爲の故に其の前に涌現して爲めに證明を作さん已上。此の文の意は、我等法華の名號を唱へば、多寶如以本願の故に必ず來り給ふ。又云く、處佛十方世界に在

て法を説くを盡く還て一處に集め給ふ已上。釋迦多寶十方の諸佛普賢菩薩等は我等善知識也。若し此の義に依らば、我等は宿善善財常啼班足等にも勝れたり。彼等は權經の知識に値ひ。我等は實教の知識に値へばなり。彼れは權經の菩薩に値ひ。我等は實教の佛菩薩に値ひ奉ればなり。涅槃經に云く、法に依て人に依らざれ。智に依て識に依らざれ已上。依法と云ふは法華涅槃常任の法也。不依人とは法華涅槃に依らざる人也。設ひ佛菩薩たりと雖、法華涅槃に依らざる依菩薩は善知識に非ず。況や法華涅槃に依らざる論師譯者人師に於てをや。依智とは佛に依るなり。不依識とは等覺已下也。今世の世間の道俗源空の謗法の失を隠さんが爲に。徳を天下に擧げて權化なりと稱すれ共依用すべからず。外道が五通を得て能く山を傾け海を竭くす共、神通なき阿含經の凡夫に及ばず。羅漢を得六通を現する二乗は華嚴方等般若の凡夫に及ばず。華嚴方等般若の等覺の菩薩も法華經の名字觀行の凡夫に及ばず。設ひ神通智慧有りと雖、權教の善知識をば用ふ可からず。我等常設一闍提の凡夫法華經を信せんと欲するは佛性を顯さんが爲めの先表也。故に妙樂大師の云く、內意に非ざるよりは何ぞ能く悟を生せん故に知ぬ悟を生ずる力は眞如に在り。故に冥業を以て外護と爲すなり已上。法華經よりの外四十餘年の諸經には十界互具無し。十界互具を説かざれば内心の佛界を知らず。内心の佛界を知らざれば外の諸佛を顯はさず。故に四十餘年の權行の者は佛を見ず設ひ佛を見奉ると雖、佛を見る也。二乗は自佛を見ず、故に成佛無し。爾前の菩薩も亦た自身の十界互具を見ず、三乘界の成佛を見ず、故に衆生無邊

誓願度の願も満足せず。故に菩薩も佛を見ざるなり。凡夫も亦十界互具を知らざる故に、自身の佛界を顯はさず。故に阿彌陀如來の來迎も無し。諸佛如來の加護も無し、譬へば盲人の自身の影を見ざるが如し、今法華經に至て九界の佛界を開く故に。四十餘年の菩薩二乘六凡始て自身の佛界を見る。此の時此の人の前に始て佛菩薩二乘を立つ。此の時二乘菩薩始て成佛し、凡夫も始て往生す。是故に在世滅後の一切衆生の誠の善知識は法華經是れ也。常途の天臺宗の學者爾前に於て當分の得道を許せ共自義に於ては猶當分の得道を許さず然りと雖、此書に於ては其義を盡さず、略して之を記す、追て之を記すべし。

大文第六 法華涅槃に依る行者の用心を明す。

一代教門の勝劣淺深難易等に於ては、先段に既に之を出す。此一段に於ては一向後世を念ふ末代常没の五逆謗法一闢提等の愚人の爲に之を注す。略して三有り。一には在家の諸人正法を護持するを以て生死を離る可く惡法を持つに依て惡道に墮つることを明し。二には但法華經の名字計りを唱へ三惡道を離る可きことを明し。三には涅槃經は法華經の流通と成ることを明す。

第一 在家の諸人正法を護持するを以て生死を離る可く、惡法を持つに依て惡道に墮つることを明す。涅槃經の第三に云、佛迦葉に告げ給はく、能く正法を護持する因縁を以ての故に是の金剛の身を成就することを得たり。亦云く、時に國王有り名を有徳と曰ふ。乃至、正法を護らんが爲めに。乃至、

### 第三輯近刊豫告

一、守護國家論(承前)

一、立正安國論

立正安國論は聖人一代の心血を

注ぎ一代の奇禍を被りしもの日

本國民として一度は必ず讀め!!

大正十三年六月十八日印刷  
大正十三年六月二十日發行

(定價金卅錢  
送料金二錢)

發行兼 編輯人 麻島竹次郎  
東京市牛込區赤城下町三十二番地

印刷人 渡邊一郎  
東京市小石川區西古川町二十五番地

印刷所 中外印刷株式會社  
東京市小石川區西古川町二十五番地

發行所 泰誠社出版部  
東京市牛込區赤城下町卅二

振替東京五三四二七番

306

301

終

